

県下初

方形周溝墓、木棺跡を発掘

墓制の解明に手掛かり

—東崎遺跡—

高知県文化財団が県立高知農業高校の西側で行っていた東崎遺跡の発掘調査がこのほど終わり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが確認されました。

でも中心的な集落であったと見られています。

今回の調査は、貸店舗の建築工事に伴って、一月始めから約一カ月間かけて行われたもので、八〇〇平方メートルを調査。昨年行われた農業高校の体育館建築の際に集落の中心部と見られる遺構が検出されたことから、今回の調査も一連のものとして、大きな期待が寄せられています。

調査の結果、竪穴住居跡十棟、壺棺墓一基、土塚、溝などが検出され、東崎遺跡がさらに西へ広がっていることが確認されました。竪穴住居跡は円形と方形の二種類で、弥生時代後期から古墳時代初期にわたっており、うち六棟はベッド状遺構を伴っていました。



方形周溝墓の本体部分

た。その中には、直径九・七メートルと大型で、比較的有力な人物の住居であったと思われるものや、焼けた柱が出土した焼失住居、垢跡が確認されたものもありました。壺棺墓は幼児用で、その回りには、墓域であることを示すように石が置かれていました。この壺棺墓は住居のすぐ近くにあり、幼児の死亡率が高かったとされるこの時代の人々の心情を垣間見ることができるようでした。

また、住居の中から、これまでもあまり発見されることがない鉄製の手鎌や鉄鏃、土製の紡錘車が出土。そのほか、勾玉、煮炊きに使ったと見られる支脚など出土遺物は約七百点。勾玉は祭祀用のもので、出雲石が使われており、山陰と交流があったことがうかがわれます。

二月二日に行われた説明会には、熱心な考古ファン約百人が参加。担当者の説明を聞いたたり、

遺構や遺物をカメラに収めたりしていました。

なお、この調査で、方形周溝墓と見られる遺構の一部が検出されたため、調査期間を延長し、発掘区域を約一六平方メートル拡大。その結果、県下で初めて、墓の本体部分がはっきりした方形周溝墓を確認、弥生後期の墓制の解明の大きな手掛かりと、関係者の注目を集めています。

これは古墳時代初期のもので、長さ三・二メートル、幅一・二メートル、墓には木棺を支えた石が並んでおり、木棺部は長さ三・一メートル、幅五〇センチ、深さ三五センチ。頭部にあたる場所からは、木を削るのに用いられた鉄製のやりがんな、刀子、瑠璃色、空色、薄緑色の三色のガラス玉が副葬されていました。すでに検出されていた壺棺墓は、周溝墓の本体を囲む溝の中にあることが確認され、溝の中からは意図的に砕いた土器片が出土。周囲の溝は一〇センチ四方で、周溝墓のある区域は、この集落の墓域であったと見られています。

今後、この地域では、開発に伴う発掘調査があるものと見込まれており、東崎遺跡の規模や全容の解明が期待されています。



国府小から国府寮へ

人権の花をプレゼント

国府小の児童が、一月二十九日、きれいな花の鉢植え二十鉢を身体障害者療護施設「国府寮」へプレゼントしました。

贈られた花は昨年十月に人権擁護委員協議会から受け取り、全校児童が育ててきた。人権の花のうち四、六年生が育てたヒヤシンス。

国府寮へ持ち込まれた鉢植えは、窪添功二君ら児童代表四人から入寮者に手渡され、国府寮の皆さんもきれいな花のプレゼントに感激していました。